

② なぜ先生は遅滞なくわずか8ヶ月で帰国されたか。

これも諸説ありますが、なんと言っても前述の通り、ご自身が設立したマサチューセッツ州立アマースト (Amhurst) 農業大学の現学長であったため、当然そちらも気がかりであったでしょうし、時間的余裕が許されなかったのでしょう。また後に触れる、「紳士は約束を厳守する」というピュリタン精神を学生に示すため帰国厳守を実行されたのでしょう。

そしてあまり知られていないことですが、同行してきた二人の教授が優秀で学生にも尊敬されており、彼らに後を心配なく委ねられたのではないかということです。

ペンハーロウ教授は後任の学長となり、またホイラー教授は先生の帰国後の翌年 (明治) には当時まだ未開地であった石狩川奥地を、学生らを引き連れて大探検旅行を举行し、これらの貴重な地理学、地質学、生物学、鉱山学的資料が数年を待たず北海道石炭の炭田開発事業を本格化させたとのこと。もし今の時代に未成年の学生をヒグマも恐れぬ決死の丸木船やカヌーでの探検に同行させたらおそらく非難ごうごうでしょう。

案内は当然アイヌ人が同行しましたが、当時としてはまだ学生側に現地人への差別意識が強く、日記などにその表現が残っています。しかし教授らはアイヌの勇敢さや人物を明確に評価して賞賛しました。この点でも士族階級出身の多い学生に人種平等の目を開かせています。

③ なぜかくも短期間に先生は影響力を爆発させ得たか? “Be gentleman.”

当然ですが Clark 先生は BBA だけでなく、種々の警句を述べられたに違いありません。これもあまり知られていないことですが、学生に対して当初から一貫して厳しく求めた言葉は BBA よりもはるかに重要な言葉がありました。“Be gentleman.” 「常に紳士たれ」です。

ご存知でしたか? 英句として簡単で当たり前すぎて BBA 程のインパクトは感じられませんよね。でもたったこの 11 文字が、先生が最初に示された言葉であり、むしろバックボーンであり、これが教育の全てであったと後年語られています。

今、改めて真の紳士とは、その資格、位置付けはと問われて正確に答えられるでしょうか? またそれぞれ読者の考え方で違いが大きいことも当然です。

先生は“Be gentleman.” を常に学生に問われ議論されたそうです。

Gentleman はまさに「武士道」と一脈通じます。ご存知の通り二期生太田稲造 (後年新渡戸姓に移籍) が後年の名著となる「Bushido」を米国人をも感嘆する崇高なる英文論文で発表したのは、ここに源があったのです。小生も邦文解説付きの「Bushido」を書店で立ち読みしましたが、難しすぎるのでそっと書棚に戻しました。

(その5に つづく)